

2023 ズバリ! 的中



日本史

早稲田大学

歴史編纂に関する内容で幕府が林家に編纂を命じた「本朝通鑑」と近世後期に頼山陽が著した「日本外史」が的中

入試問題

2月12日実施
文化構想学部 一般
〔II〕〔問〕6、8

〔II〕 日本における歴史の編纂や叙述に関する次の文章を読んで、問に答えなさい。

古代における律令国家の成立は、そこへ至る歴史に対する関心をよびおこした。こうして、はじめての正史である『日本書紀』が編纂された。平安時代になると、虚構をまじえた歴史物語や合戦の経緯を描いた軍記物語なども登場し、その後、多彩な歴史叙述が展開していった。軍記物語では、平氏の栄華から滅亡を描いた『平家物語』が特に有名で、それは琵琶法師が〔A〕として語り、多くの人びとに受け入れられたことよるところが大きかった。『平家物語』は史料として活用されることも多く、現代の人びとの歴史観にも大きな影響を与えている。

中世で歴史観・歴史理論に関する著作としては、慈円の『愚管抄』、北畠親房の『神皇正統記』がよく知られている。著者の出自や政治的立場に規定されている観は否めないが、個人の歴史観・歴史理論が発揮されていること自体は注目すべきであろう。このほか、鎌倉～南北朝時代には特色ある歴史編纂・叙述が、さまざまに行われた。これと比較すると室町～戦国時代はやや見劣りがするようにも思えるが、もちろん異なる見方もあるところであろう。

近世になると江戸幕府は林羅山・鷲峰父子に国史編纂を命じた。これによって成ったのが『〔B〕』である。また、水戸藩では『大日本史』の編纂がおこなわれた。歴史叙述では新井白石なども独自の歴史観を展開し、近世後期には頼山陽が『〔C〕』などで尊王論を説いた。

近世には幕府・諸藩で古文書の収集・編纂がしばしばみられたが、これもみずからの歴史に対する関心の高まり、それに基づく歴史編纂・叙述の準備と捉えられよう。近代には東京帝国大学の史料編纂部で、収集した膨大な史料を用い、『〔D〕』『大日本古文書』などの編纂が進められた。民間では〔E〕が『日本開化小史』を著し、歴史の編纂や叙述は担い手も著作数も増加していったが、そのような政治的な問題もしばしば生じることとなった。

〔問〕

⋮

6 空欄Bに該当する語句はどれか。1つ選び、マーク解答用紙の該当する記号をマークしなさい。
ア 中朝事実 イ 武家事紀 **ウ** 本朝通鑑 エ 古史通 オ 藩翰譜

⋮

8 空欄Cに該当する語句はどれか。1つ選び、マーク解答用紙の該当する記号をマークしなさい。
ア 自然真言道 **イ** 日本外史 ウ 懐機論 エ 新論 オ 戊戌夢物語

河合塾

冬期講習
早慶大日本史
第1講 1〔A〕

第 1 講

① 次の文章を読み、下記の設問に答えよ。

6世紀半ばに大和政権が統一をほぼ達成すると、国家としての自覚が芽生えるとともに歴史を記録する作業も始まったと考えられ、それは『帝紀』〔(1)〕の編纂に求められている。これらは現存しないが、律令体制確立期に編纂された『古事記』と〔(7)〕『日本書紀』はこの二書をもとに編纂されている。こうした史書編纂の目的は、神話からはじまる歴史叙述によって、天皇家(大王家)の支配の正統性を示すことにあった。それは「天孫降臨(天皇は神の子孫)」、「万世一系(天皇家の血筋は一つ)」という二つの理念による「神の正統な子孫である天皇」こそが、日本の支配者として正統であるとする考えである。日本の正史編纂は中国の模倣とされるが、〔(4)〕中国の正史が前王朝滅亡後に新王朝の手で編纂されたのに対し、日本では自らの史書を編纂するという点で成立の経緯が異なる。

『日本書紀』以降の正史を〔(9)〕六国史と総称するが、『統日本紀』以降は記録を後世に残すことに主眼が移り、むしろ「実録」というべきものである。法治国家の運営は法に基づく先例を守ることであり、その記録を後世に伝えるという重要な役割を担ったのである。だからこそ、六国史を部門別に編纂し直した『類聚国史』が〔(2)〕の手で編纂された。また、六国史で史書編纂が打ち切られたわけではなく、未定稿のまま『新国史』の名での逸文が現在に伝わっている。しかし、史書編纂への興味は薄れ、編纂事業は自然消滅していった。

〔(3)〕法皇の命令で〔(4)〕により編纂が開始された『本朝世紀』は、六国史を継ぐ意図のみえる特別な事例である。

国家事業としての史書編纂が衰退する一方で平安後期以降盛んとなったのが、個人による歴史物語や歴史書の作成である。こうした書は一定の個人の視点から書かれているが、正編が赤染衛門の作といわれる『栄華物語』は〔(5)〕天皇から始まっており、やはり六国史を継ぐものとの意識があった可能性がある。一方、紀伝体歴史物語の最初である『(6)』は、歴史の裏面を描くことに重点が置かれている。また、〔(7)〕慈円の『愚管抄』は、歴史を道徳と未法思想により分析する独特の史観を示し、北畠親房の『神皇正統記』は、朱子学の〔(7)〕に基づいて南朝の正統性を主張している。一方、民衆に過去を伝える役割を果たしたのが軍記物語である。なかでも『平家物語』と〔(8)〕はその双璧であり、ともに独特の節回しによって語り継がれた。

こうしたなか、武家政権では正史は編纂されなかった。鎌倉幕府の史書としては『吾妻鏡』が挙げられるが、編纂のために特別な部局が置かれた形跡はなく、幕府関係の個人もしくは家において編纂されたものとも考えられる。室町幕府にいたってはそうした記録すら編纂されていない。これに対し、江戸幕府は、正規の史書編纂事業に取り組んだ。17世紀には

林家に命じて徳代から後陽成天皇までの編年体史書である『(9)』を編纂し、さらに(4)19世紀初頭から徳川將軍ごとの実録として『徳川実紀』が編纂された。これは江戸幕府が公的政権としての自覚を持ち、記録を後世に伝えるという役目を担う意識があったからであろう。事実、両書に共通する姿勢は、事実を正確に記録することであり、徳川氏の支配を正当化するという意図はみられない。むしろそうしたある一定の思想による歴史分析は、個人の歴史書で行われた。その代表的な著作として、独特の時代区分により徳川政権の正統性を説いた新井白石の『読史余論』や、頼山陽の『(00)』などが挙げられよう。

〔A〕文中の空欄(1)～(00)に入る最も適切な語句や人名を下の語群より選べ。

《語群》

- | | | | |
|-----------|-------------|------------|----------|
| 11 今鏡 | 12 宇多 | 13 大鏡 | 14 太安万侶 |
| 15 刑部親王 | 16 旧辭 | 17 光孝 | 18 古史通 |
| 19 後白河 | 20 国記 | 21 治承・寿永の乱 | 22 承久の乱 |
| 23 将門記 | 24 続日本後紀 | 25 白河 | 26 沈約 |
| 27 菅野真道 | 28 菅原道真 | 29 清和 | 30 大義名分論 |
| 31 大日本史 | 32 太平記 | 33 知行合一 | 34 中朝事実 |
| 35 陳寿 | 36 天皇記 | 37 徳川家綱 | 38 徳川家斉 |
| 39 徳川綱吉 | 40 舍人親王 | 41 鳥羽 | 42 日本外史 |
| 43 日本三代実録 | 44 日本文徳天皇実録 | 45 班固 | 46 范曄 |
| 47 藤原明衡 | 48 藤原定家 | 49 藤原通憲 | 50 保元の乱 |
| 51 本地垂迹説 | 52 本朝通鑑 | 53 増鏡 | 54 水鏡 |
| 55 三善清行 | 56 陸奥話記 | 57 陽成 | 58 柳子新論 |